



50

号記念エッセイ

租界・居留地班の活動をふりかえって
—歴史の三角測量をめざして

孫 安石（非文字資料研究センター 研究員）

文部科学省が開始した21世紀COEプログラムの申請として神奈川大学が提出した「人類文化研究のための非文字資料の体系化」が採択されたのが2003年度であったが、租界・居留地班の活動は、当初から「第3班 環境と景観の資料化と体系化」の課題の一つとして取り上げられていた。従って、ほぼ20年ほどにわたって租界・居留地という一つの研究テーマを続けたことになる。

いまからふりかえると、中国（上海、天津、漢口、青島など）と台湾、そして韓国の現地調査に加え、台湾の国史館、中央研究院、上海市檔案館などでの資料収集などを続けながら非文字資料と歴史研究をどのように繋ぎ合わせることができるのか、の方法論を巡って四苦八苦しながら模索してきた時期が長く続いた。その後、租界・居留地班の研究として最も手応えを感じた共同研究の成果が「在華紡の居住環境について—上海の事例」（『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解説』、2008年2月、所収、【図1】）であったように覚えている。

文理協働型の研究をめざして

すなわち、20世紀前半の日本経済において重要な役割を果たした在華紡（中国における日本の紡績会社）が中国にどのような手順で進出し、現地の都市空間の形成に影響を与えたのかを、歴史研究の他に建築という側面から当時の地図、設計図、そして、当時の生活環境については現地の関係者の聞き取りなどを実施する方法論を獲得するまでには多くの手間と時間がかかったが、以降の租界・居留地班の研究成果は基本的にこの論考の形式を踏襲することになった。後に刊行された『中国・朝鮮における租界の歴史と建築遺産』（御茶の水書房、2010年、【図2】）の「まえがき」にも歴史学と建築学の「文理協働型」研究とはまさにこの研究手法を指すものに他ならない、とある。

これとほぼ同じ時期の2006年に行われた第1回国際シンポジウム『非文字資料とはなにか—人類文化の記憶と記録』のなかで川田順造氏は、「非文字資料から見る人類文化」という基調講演のなかで、運動体としてのヒト＝人間の活動は視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚な



【図1】



【図2】

どのような感覚の表象を研究対象としながら、身体表象＝身体技法と口頭伝承という分野の研究が立ち遅れていることを指摘し、文字文化のみに頼る研究だけではヒトの文化全体を描くことはできないと指摘し、非文字資料の研究と合わせて日本、フランス、西アフリカ内陸社会を比較する「文化の三角測量」という理論を提唱した。しかし、これは人類文化の研究のための外縁を広げた川田氏の壮大な研究理論であって、私のような狭い範囲の歴史を研究対象にする凡人に取ってはひとまず、文理協働型の研究を実践することにやっとの思いで到達した、という限界は認めざるをえない。

寄贈資料の収集・整理・利用について

ところが、このような限界のなかで一つ現在進行形として報告すべきものとして、寄贈資料の収集・整理・利用というカテゴリがある。

例えば、非文字資料研究センターのHPにも一部が公開されている「近藤恒弘コレクション」は、1929年に天津で生まれ、幼稚園、小学校時代を過ごし、天津日本中学校の4年生の時に終戦を迎えた近藤恒弘氏が、戦後、中学のクラス会の幹事を務めながら、天津ガイドブックを作成しようと収集した日本語、中国語を含めた地図、写真集、絵葉書、個人が写した写真、案内書、電車の切符、関連書籍などを集めたコレクションで2013年から数回にわたり、非文字資料研究センターに寄贈をいただいたものである。また、「中国文化大革命ポスターコレクション」は、中国研究者の新島淳良氏が1960

～70年代に収集した中国と日本のポスター作品を、2017年に奥様の里子氏から寄贈を受けたもので、総点数約500の中に中国文化大革命時期のポスター約200点が含まれていた。そこで、2017年から2019年にかけて資料の修復とデジタル化を終え、2019年2月にはその成果の一部を「中国文化大革命を振り返る」というタイトルのシンポジウムで報告し、約200名の参加者が集まり、盛況裏におひろめすることができた。そして、2023年度中には非文字資料研究センター叢書『中国文化大革命ポスターを読む』（仮）として刊行される予定である。

そして、最近になっては、川合安平（かわいやすへい）氏から戦前の上海の街並みを写した写真約1200枚が寄贈されている。「川合安平上海写真コレクション」は、海軍軍属の建築技師として上海に滞在した1940年8月から1945年3月の間、日本が上海を事実上、支配した時期の上海バンドや共同租界、そして、日本人街などの街並みと風景を撮影したもので、撮影の時間と場所が特定できる点、極めて貴重な資料であると言える。



【図3】「川合安平上海写真コレクション」

このような寄贈資料の収集と整理は、その他の共同研究グループでも進んでおり、国策紙芝居研究班の「国策紙芝居コレクション」は最初の合計241点から合計362点までに収集が拡大している。今後の租界・居留地班の研究では、これら寄贈資料を活用した研究成果の発表により力を入れてゆかなければならない。

歴史の三角測量をめざして

いままでのふりかえりが過去と現在の租界・居留地班の活動についてであったが、今後の課題についても触れておきたい。それは、一つに、いままでの租界・居留地班の資料が日本語と中国語関連の行政文書、新聞雑誌、会社などの記録に偏り、意外にも英文資料の収集と利活用が遅れているという限界を克服しなければならない、という課題である。その一部については、筆者自身も租界・居留地班の第79回例会（2022年9月）において「上海の英字新聞DBの紹介—The China Pressを中心に」という題で報告したことがあるが、神奈川大学図書館ではProQuest Historical Newspapers: Chinese Newspapers Collectionの英字新聞データ・ベース（合計23種類の資料）とService Lists and Reports of the Chinese Maritime Customs Ser-

vice and Whangpoo Conservancy Board（中国海関職員録および黄浦河道局・上海港報告集1890–1943年）、The Minutes of the Shanghai Municipal Council（上海・共同租界工部局の参事会の記録）、Shanghai Municipal Council: The Municipal Gazette, 1908–1940（上海・共同租界・居留地班工部局の機関誌）などの利用が可能であり、今後、さらなる活用を模索する必要がある（【図4】を参照）。



【図4】「Impact」（Science Impact, 2021年2月号）に紹介された租界・居留地班の活動紹介

そして、もう一つは、租界・居留地班が得意とする歴史研究の手法のほかに異分野との交流を通して、新たな研究の可能性を追求しなければならないという課題である。例えば、租界・居留地班は歴史学と建築学という異分野との交流を通して、いままで合計3冊（『中国における日本租界』、御茶の水書房、2006年、『租界研究新動態（歴史・建築）』中国、上海人民出版社、2011年、『東アジアにおける租界研究—その成立と展開』、東方書店、2020年）の研究成果を世に送り出すことができたが、今後は寄贈資料などを「社会に発信し還元するためには、『資料の関連性や作業内容に即した検索とマイニング』、資料提供者や研究者の個人情報や重要情報、著作権の管理、資料提供や作業の対価やインセンティブとなる『多様な価値観に基づく地域通貨の価値交換』が必要となる。」という第5班の指摘を大いに取り入れながら「知識とサービス、物の流通と価値交換」、『知識とサービスの検索とマイニング』、『個人情報や重要情報、著作権の管理』で必要な基盤技術に機械学習とブロックチェーンなどを応用する。」ことに気を配りながら、寄贈資料の研究成果の公表を続けていきたい（以上については、「研究活動紹介 第5班 非文字資料の研究とその成果の利用の過程における検索とマイニング、セキュリティ、著作権管理に関する研究」<http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/outline/index.html>を参照）。

以上で述べてきた寄贈資料の収集、整理、英文資料の利活用、そして、異分野との交流という研究活動を通して、川田順造氏がめざした人類文化という遠大な「文化の三角測量」には及ばないにしても、地に根を下ろした歴史の三角測量をめざしていきたい。